

公害の根源は亜ヒ焼き労働



1930年頃の土呂久鉱山

① 亜ヒ酸の用途



石見銀山鼠捕りの原鉱
(硫ヒ鉄鉱)



亜ヒ酸

0.1~0.3グラムで人が死ぬ

1918年ごろから亜ヒ酸の需要が急増、
日本各地で亜ヒ酸の製造が始まった。

亜ヒ酸の用途

1. 石見銀山ネズミ取り
江戸時代にネコいらずとして使われた。

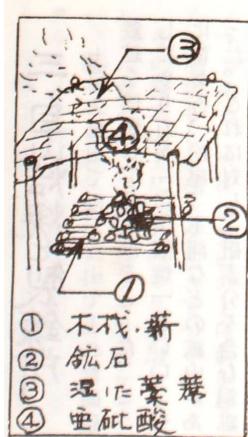
2. 農薬の原料

19世紀中ごろアメリカでジャガイモにつく害虫退治に亜ヒ酸が効果的だとわかる。
1920年ごろからアメリカの綿花畠の害虫駆除に空中散布。
大量の亜ヒ酸が必要に。

3. 毒ガスの原料に

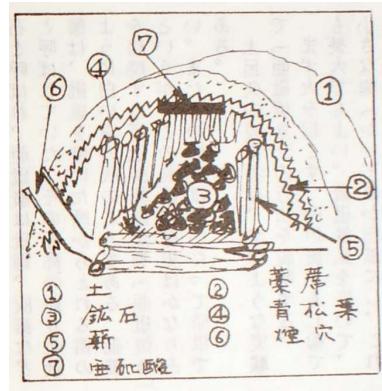
第1次世界大戦で、ドイツが亜ヒ酸を原料にした毒ガスを使用。日本軍も1933年から瀬戸内海の大久野島で製造。

② 亜ヒ酸製法の歴史



①露天式

イラスト 横井英紀氏



②炭焼き式



③登り窯式



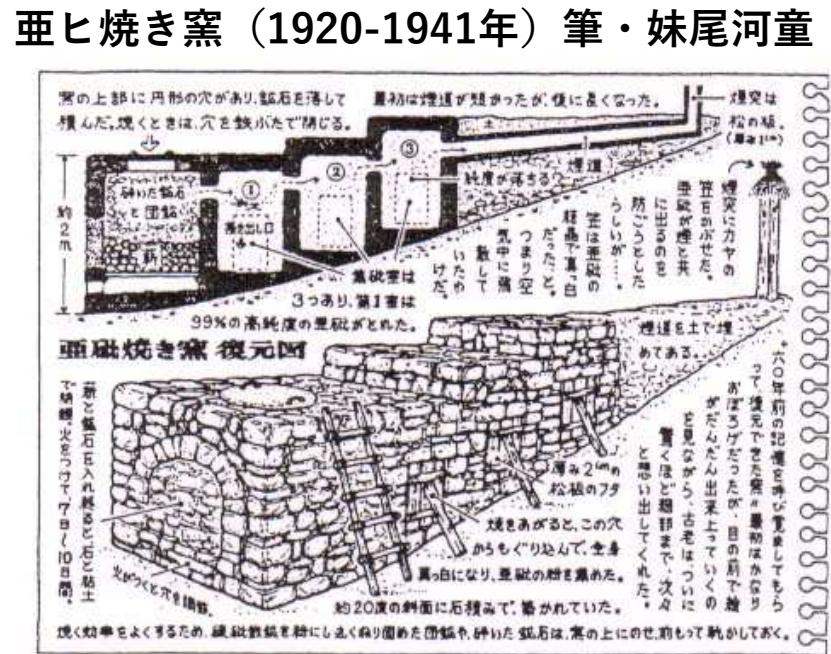
④連続焙焼式

①は野原の焚き火にヒ鉱をいれて、飛び立った亜ヒ酸を天幕のむしろで採集する方法。②は煙を閉じ込めた窯の中でヒ鉱を蒸し焼きにする方法で、品質が悪いうえに増産が難しいという欠点があった。③はヒ鉱を焼く部屋のほかに収ヒ室という空き部屋を設けて、煙を収ヒ室に滞留させて結晶化した亜ヒ酸を採集する方法。④は木炭とコークスとヒ鉱を混ぜて燃焼させる炉をロストル式にすることで、連續焙焼を可能にした。土呂久鉱山では、1920年から41年まで③登り窯式、55年から62年まで④連續焙焼式で亜ヒ酸を製造した。

③ 非人間的な亞ヒ焼き労働

「亜ヒ酸を取れるだけ取ったあと、隅々に残っているのは搔き出し棒が届かないので、中に入つてスコップでとるわけです。入つた瞬間に頭の毛がバリバリと音がします。練白粉を目だけ出して顔全部に塗り、マスク代わりにタオルに石鹼を塗りつけて、その上から頬かむりして、その上からもう一度濡らしたタオルで目だけを出して、うしろに巻き付けて中へ入るわけです。防じんマスクをつけると、鼻の上から口の周囲に、ゴムが溶けてついたような形に火傷をする。あとで水膨れになり、皮が浮き出しました。マスクをつけたのは1回だけで、あとはタオルでやりました」

(新型焙焼炉で働いた鶴野秀男さんの裁判証言)



新型焙燒爐（1955-1962年）

④ 亜ヒ焼き労働者の健康被害

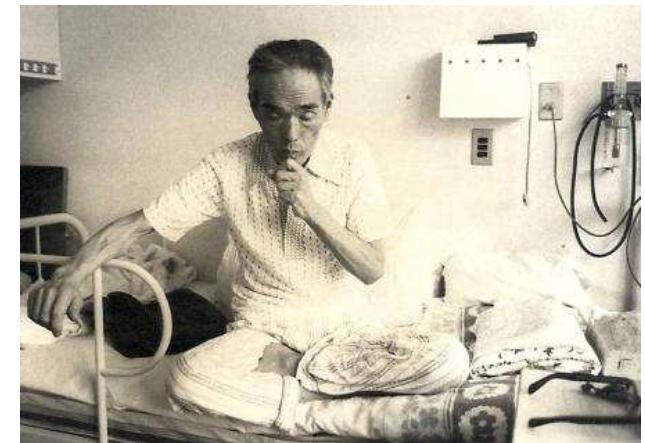
鶴野政市さんは義父の借金返済のために土呂久の農家で住み込みの小作人として働いていたとき、「鉱山が始まる。いい金になる」と亜ヒ焼き労働を紹介された。

手足に無数のコブ、しわがれ声、気管支をやられて横寝がでけん。片肺はつまらん。心臓は弱い。慢性の胃腸炎に失明寸前の目。砒素中毒の見本のごつ病気もちで、最後は性根もねえなって50歳の生涯を終えた。

「お金が欲しいばかりに、亜ヒ焼きをして稼いで、まこつ、金が仇(かたき)の人生じゃの」
(鶴野クミさんの話)



角化症（バングラデシュで）



慢性気管支炎にかかった
土呂久公害患者

⑤ 亜ヒ焼き労働者の出自

写真中央に座る鉱山長の川田平三郎氏を囲む鉱山労働者は、ほとんどが土呂久と周辺に住む貧しい農民たち。鉱山労働の中で最も収入がよかつたのが危険な亜ヒ焼き労働で、生活に困窮し、お金が必要な人たちの働き場になっていた。

「日役がちと高かったから、それだけに迷らせて、みんな亜ヒ焼きに行ったっちゃが。孫子を太らすために、今にすれば一日何百円もちがうんで、それで無理したとよ」
（亜ヒ焼き労働者の孫の話）



1924年（上）と1933年（下）に撮影した土呂久鉱山労働者の記念写真



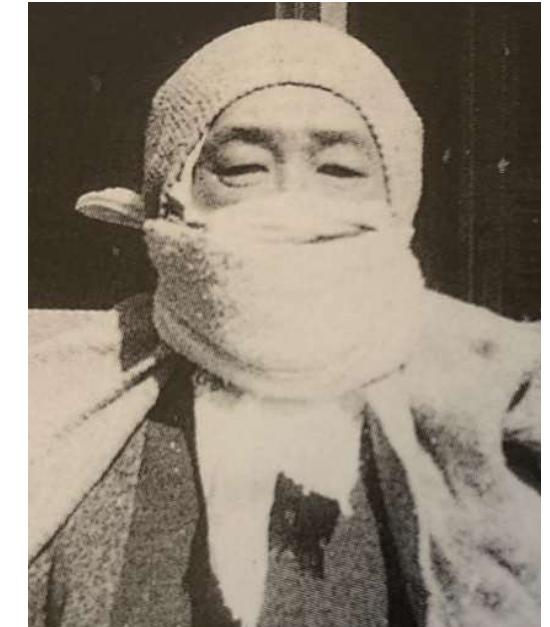
⑥ 亜ヒ酸鉱山の背景

貨幣経済が浸透した農山村では、階層分化が進んで、広い農地・山林を所有する地主、富かな農民、貧しい農民、土地なし農民に分かれていった。

土呂久のような小規模鉱山は、こうした農民層の分解の上に成り立っていた。貧困農民を低賃金の労働者として雇い、もっとも危険で非人間的な亜ヒ焼きを生活に困窮した土地なし農民にやらせた。

亜ヒ焼き労働者は健康・生命を侵されても、「他の仕事よりも収入が多いのだから」と、その不満を鉱山経営者にぶつけることはなく、健康被害の原因が亜ヒ焼き労働にあると指摘する医師も地元にはいなかった。

1960年代後半に四大公害訴訟が提起されて初めて、亜ヒ焼き労働者の健康被害が社会に浮上したのだった。



亜ヒ焼き労働者の服装
(再現写真)

結び

土呂久公害の根源は、非人間的な亜ヒ焼き労働だった。亜ヒ焼き労働者の全身に不治の病をおわせた煙が、鉱山の境界を越えて集落に流れていき、多くの住民に健康被害をもたらした。すなわち公害を引き起こしたのである。